

海外出張の思い出（帰国に向けて⑫）

高島敬明

日本への帰国は何の問題もなく、モスクワで2泊し、クレムリン宮殿、レーニン廟、グム百貨店などを見学し、買い物をしました。お土産は、有名なマトリョーシカ、熊の毛皮の帽子（モスクワでは真冬無帽で出歩くと警察に逮捕されると言われています）、それから随分苦勞を掛けた家内への感謝を込めて、〈真っ白の銀狐のマフラー、琥珀のネックレス、ブレスレット等〉をお金のことは考えずに買いまくりました。

エアロフロート機は、1977年に出発の時の羽田空港ではなく、完成した成田空港（1978年5月20日開港）に無事に到着しました。

1年ぶりに本社ビルを見た時、流石に感慨深いものがありました。挨拶回りを済ませると、また通常の建設関係の営業と現場指導の仕事に復帰しました。まず、寺島さんから頼まれたお兄さんへの手紙を書きました。焼き増しした写真、それに、寺島さんはご家族共々非常にお元気であること、生活は裕福であること、望郷の念が強いこと、ご親族の近況が知りたいこと等を書いて、札幌の74歳の寺島親蔵氏にお送りしました。折り返し丁寧なお礼の手紙が綺麗な字で届きました。約束を果たして本当にホッとしました。

そんなある日の夕方、疲れて会社に帰ると上司から、「高島、奥の応接に公安の人が待っているよ。すぐに行ってくれ」と言われました。

私は『公安』という言葉がピンと来なかったので、「何ですか？」と聞き返しました。「お前、公安を知らないのか！『警察』だよ。」と言われたので急に不安になり、何か悪いことをしたかな？交通違反かな？と考えましたが、思い当たるフシはありません。身なりを整え応接室に入って行きました。予想に反し、ニコニコした32、3歳の若い背広の人が愛想よく、「このたびはご苦勞様でした。本当に大変だったでしょう。」と言われ、当時のタ



1979年完成。カスピ海のバクーから配管で運ばれた原油を黒海のノボロシースクで外洋に運ぶため、直径28インチの当時最大のローディングアーム（流体荷役装置）を設置しました。（GoogleEarthより、2018年撮影）

バコ〈ハイライト〉が10箱入ったカートンを頂きました。ロシアの話を知りたいということでした。私は言われるままに今回の工事の概要を話し、宿舎の生活などの話をしました。交通の事、お金の事、病院の事、学校の事、日本の船の入港の事他細かいことまで聞かれました。答えられる範囲でお答えし、2時間くらい経ったころやっと終わりました。最後に何か変わった話はありませんでしたか？との質問です。「はあ……。そうそう寺島儀蔵さんという人が私の通訳でした。昭和10年に樺太からソ連に亡命したと話していました。18年間シベリアに送られたそうです。」と答えますと若い公安の人の目の色が少し変わったように思いました。真剣に話をメモしていました。その日はそれで終わり、やれやれそんなことかと安心して家路につきました。

1週間たった頃でしょうか、再度「公安」の訪問を受けました。彼は一方的に話を始めました。「高島さん、あの辺りは我々西側の人間は絶対に入れないところで、情報は一切入って来ません。それは宗教的な問題で、回教徒の国が近く、回教徒の国民も多く何かと問題になっているところです。子どもたちの移動には青色回転灯を付けた警

察車が前後護衛することもあって、国境警備の厳しきもすべてそのためです。そんな意味であなたは貴重な経験をされました。寺島儀蔵さんは確かにいました。昭和10年に行方不明になっています。いまでも日本国籍があります。」などとガンガン話されて面接は終わりました。何年か後に書店で購入した寺島さんの著書では、「私は日本国籍がありません」と書いてありましたが、この時の私の言動で国籍を抹消されたのではないかと心配になりました。

それから数年が経ちました。日本経済新聞の2面の1/4の紙面に『忘れられた人々』、と題した連載が掲載されるようになりました。ある日紙面の連載の所を何気なく見ていましたら、何と作者を見ると「寺島儀蔵」とあり、本当にびっくりしました。詳細に書かれた記録文章は驚くような内容で、毎日毎日目を皿のようにして読みました。本当にこのような経験をされたのかと驚愕の日々でした。寺島さんが帰国を許されて日本に来られたのは、1993年で83歳の時でした。

まだ『忘れられた人々』の連載が終わっていない頃だったように記憶しています。私は長期の建設現場への出張から帰ってきて、これからの新規営業の為の情報を得ようとたまに日経新聞を読んでいました。隅々この小さな記事に、〈寺島儀蔵氏帰国する〉と見出しがありました。新聞の日付を見ると1か月くらい前の新聞だったと思いますが、目が釘付けになり夜だったにも拘わらず日本経済新聞社に電話を入れて聞きましたが、要領を得ず再度翌朝電話で尋ねました。返答は日本での仕事と休養を終えてやはりひと月前に帰国したとのことでした。タッチの差でして非常に残念無念でした。日経の記者の皆様、日本経済新聞社の方々、各方面の方々のご尽力と保証があってこそ、シベリア送りの体験の方が帰国できたものと思います。また「本の執筆の仕事」のため旅行の許可が取れたのかと推測しています。寺島さんは絶対に私の事を覚えていてくれたはずなのに、と悔しかったのを覚えています。一方こんな私のような人間のことなど忘れていたさ、とも思ったりしまし

た。日経新聞の連載中になぜ同社に電話を入れなかったのかと悔やんだりもしました。

それから数年後だったと思います。おそらく新聞に連載された記事をまとめて出版されたのでしよう。日本経済新聞出版から『長い旅の記録』として2冊立派な本が出版されました。私は全く知らなかったのですが、会社の大先輩から「高島、お前の名前が出ている本があるぞ！」と言われ、この本のことを知りました。早速古本市で買い求めましたが、牢獄暮らしなどの体験をよく覚えていたものだと思うぐらい詳しく書いた本でした。2冊目には監獄から釈放されてからの事、日本企業との通訳の仕事などが書かれています。ノボロシースクの仕事についても書かれています。エンジニアリング会社の偉い人の名前は出てきませんが、私の名前は忘れないで出てきます。「寺島さんが注意したのにゴムボートが盗難に遭った」話の他、2か所ほど出てきます。私のことは忘れていなかったのです。お逢いしてその後の人生のお話など聞きたかったのですが、もうそれもかなわなくなっていました。その後、寺島さんが帰国時に釧路の親戚宅に逗留し、執筆活動をしたと聞きしました。また出版の仕事などで数回帰国されたことも聞きました。よかったなあ。人生悪いことも良いことも帳消しになったのかな、などと自分に言い聞かせ納得していました。立派な数奇な運命の人と知り合いになれたことは、人生の最大の思い出として胸にしまっておこうとしましたが、やはりこのシリーズに掲載するべきと考え長々と書いてしまいました。お許してください。

寺島儀蔵氏は、2001年、晩年暮らした黒海沿岸の街・トアプセで亡くなりました。本当に波乱の一生でしたが、晩年は心穏やかな日々が続いたのは良かったと思います。最愛の人・ナージャと一緒にいられたことは彼にとって幸せな事でした。なおナージャの消息は分かりません。連れ子の男の子は、現在は何をされているのかは定かではありませんが、当時寺島さんから教師をされているとお聞きしたことを付言しておきます。

(ソ連編完)